井伊家と掛川

掛川城十九首

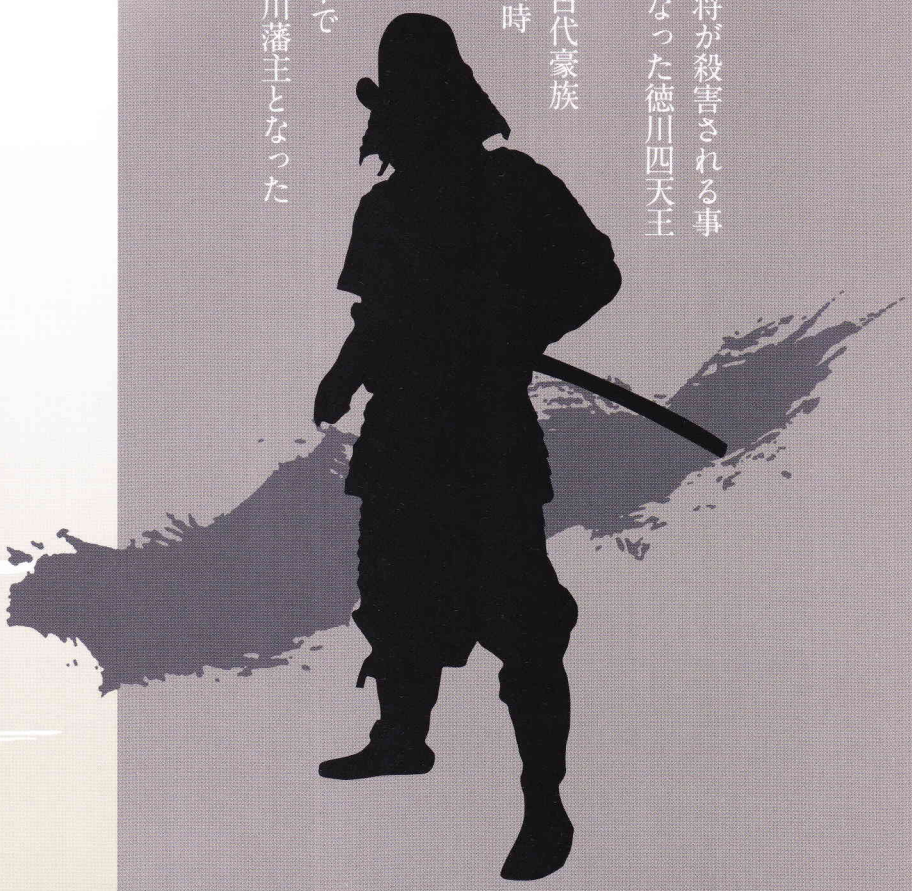
静岡県掛川市

プロローグ

今から450年程前の戦国時代後半、掛川城下において、とある武将が殺害される事件が起きました。その武将の名は井伊直親、後に徳川幕府開幕の礎となった徳川四天王の一人、井伊直政の父親でした。

井伊直親の井伊家は、浜松市引佐地方の井伊谷周辺を本拠とし、古代豪族を端緒とする名門の武士でしたが、今川氏、徳川氏、武田氏という当時の巨大勢力の狭間にあり、その家運は巨大勢力に翻弄され、まさに風前の灯火でした。名門井伊家の血筋を絶やさないために手腕をふるったのが、井伊直親の許嫁とされるヒロイン井伊直虎です。

ヒロイン直虎と掛川の直接的な関係は見い出せませんが、掛川城下で起きた井伊直親殺害事件、殺害場所ともされる十九首、江戸時代に掛川藩主となった井伊家についてみてみましょう。



井伊直親殺害とその背景

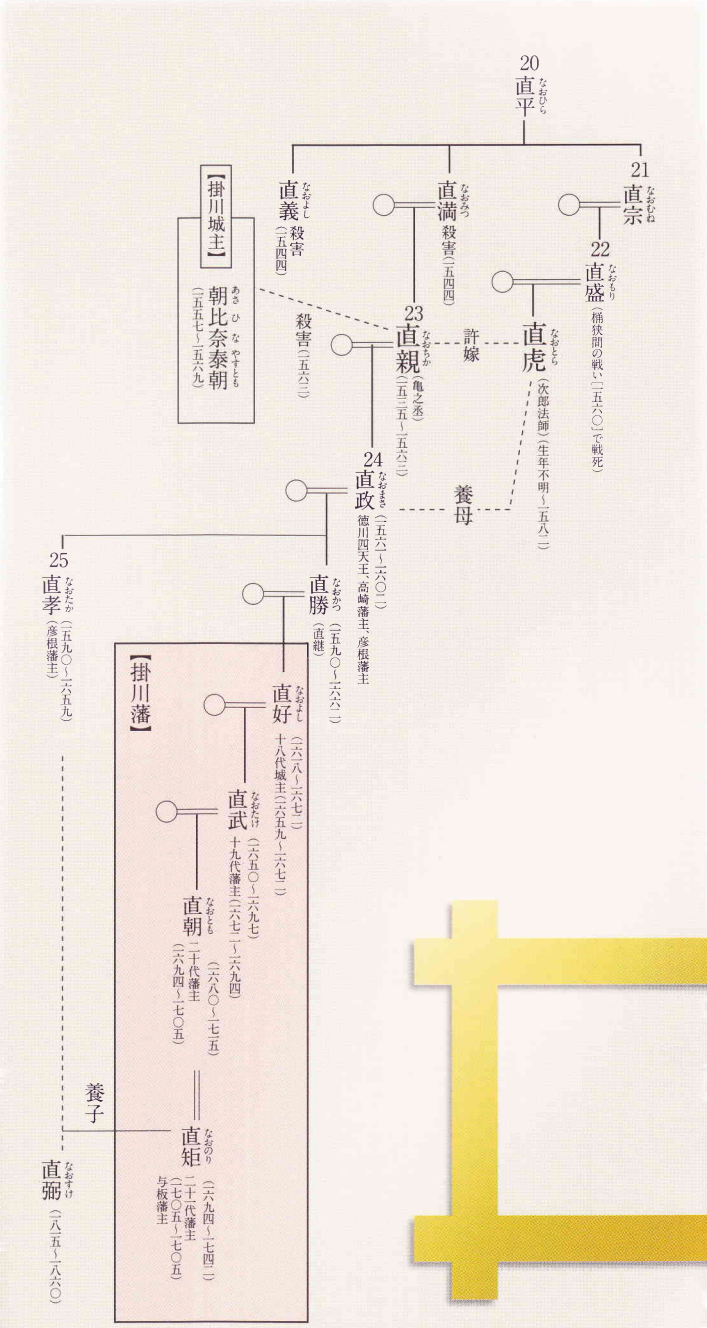
戦国時代、井伊谷を含む遠江は、その覇権をめぐって今川氏と斯波氏が争っていました。井伊氏は天野・奥山氏などと同様、今川氏と斯波氏の戦いに翻弄されながらもしたたかに領地を支配、経営する国人もしくは国衆などと呼ばれる在地領主でした。

遠江守護が斯波氏から今川氏に代わり、今川氏が遠江支配を盤石にしようとしていた矢先、遠江を揺るがす事件が起こります。永禄3年（1560）桶狭間の戦いで、今川氏の当主義元が織田信長に討たれたことにより遠江は混乱状態に陥り、今川氏に反旗を翻す在地領主も出てきたのです。

その頃、新たに井伊家の当主となった直親は、遠江を手中にしようとしていた三河の松平元康（徳川家康）から、今川氏を見限り徳川に付くよう誘いを受けたとされています。家康にとって井伊氏をはじめとする有力在地領主を味方に付けることは、遠江を手中におさめる上で非常に有効な手立てであり、家康は積極的な働きかけを行っていました。

そんな不穏な動きに対し、今川氏は井伊氏に謀反の嫌疑を掛けます。永禄6年（1563）直親は謀反の意思がない旨の申し開きのために今川氏の本拠、駿府に向かいました。ところが、駿府に向かう途中の掛川城下で、今川氏重臣の掛川城主朝比奈泰朝に殺害されてしまったのです。それ以前にも今川氏に謀反を疑われた直親の父直満と叔父直義が駿府にて殺害（自害）、直虎の父直盛は桶狭間で戦死、相次ぐ当主の死により井伊家はお家存亡の危機に瀕していました。

この一連の今川氏による井伊家当主の誅殺については、今川氏が遠江支配のために井伊家の駆逐もしくは弱体化を狙っていたと考えられますが、井伊家の後継をめぐる内部抗争が関係していたとも考えられます。



掛川城主朝比奈泰朝

井伊直親を殺害した掛川城主の朝比奈泰朝とは、どんな人物だったのでしょうか。朝比奈氏は現在の焼津市と藤枝市周辺が発祥の地とされ、鎌倉時代に活躍した和田義盛の三男の後裔ともされますが不明な点も多く、その後の朝比奈氏にはいくつかの系統があったとされています。朝比奈氏が歴史上に確実に現れるのは16世紀初め頃で、今川氏の命により朝比奈泰熙（初代）が掛川古城を築城しました。

二代泰能の時、古城から現在の地に新たに掛川城を移し、東遠江の要になるとともに今川氏の隆盛を支える重臣となりました。

泰能の跡を継いだのが三代泰朝です。泰能の代、永禄3年（1560）桶狭間の戦いで今川義元が倒されると今川氏の隆盛にも翳りが見え始め、永禄11年（1568）ついに武田信玄が今川氏の駿府に侵攻、駿府を追われた今川氏真（義元の子）は朝比奈泰朝を頼って掛川城に逃げ込みました。ちなみにこの時、武田信玄と徳川家康は今川領分割の密約を結び、大井川を境にして東を武田氏が、西を徳川氏がそれぞれ

攻め取ることにしたとされます。

氏真が逃げ込んだ掛川城には徳川家康が攻め込み、半年間の籠城の末、開城、掛川城は徳川氏の城となりました。この戦いで名門今川氏は滅亡、氏真は小田原北条氏を頼りその庇護を受けることとなります。その後の泰朝の動向ははっきりしませんが、多くの今川家臣が氏真を見限って徳川、武田氏に寝返る中、泰朝は最後まで氏真に忠義を尽くしました。したがって、忠義に篤い泰朝にとっては、氏真による直親殺害の命令は絶対的なものであったはずです。

桶狭間の戦い以降、井伊氏や飯尾氏などの西遠江の有力な在地領主が今川氏からの離叛の動きを著しくする中、それを阻止する最前線にいたのが今川氏重臣の朝比奈氏でした。主家である今川氏への篤い忠誠心とその命令は絶対であり、今川離叛の芽を摘むためにも直親殺害は避けられなかったと考えられます。

十九首と平将門の首塚伝説

井伊直親の殺害場所については十九首とも云われていますが、そこは平将門にまつわる首塚伝説が残されている場所でもあります。

首塚伝説の発端ともなった平将門の乱とは、天慶2年（939）に起きた古代史上最大の内乱です。平将門は一族内での抗争を経て関東の地で常陸・下野・上野の国府を攻め落とし、新皇と称して京の朝廷に対立する新政権を打ち立てたのです。乱は朝廷軍によって鎮圧、平将門は討伐され、その首級は京に運ばれ、洛中において獄門となりました。

京都において獄門に晒された将門の首級は、将門の故地、下総国猿島（茨城県坂東市）へと向かって飛び立ち、途中で力尽き落下したのが各地に伝わる将門の首塚です。将門の首塚としては、東京の大手町にある将門塚が最も有名ですが、京都以東には将門の首塚・胴塚と伝わるものが15箇所程分布しています。

将門の首塚の多くは、斬首された胴を求め空飛ぶ首が力尽きて落ちた所が首塚とされたものがほとんどを占める中、掛川の十九首の首塚は敵将の藤原秀郷によって埋葬されたとされるものです。平将門の首級を下総国から京に運ぼうとした藤原秀郷は、下向してきた朝廷の使者と掛川で出会い、使者から首級をうち捨てるように指示されたとされます。朝敵とは言え武人の首級を粗末に扱うことを偲び難く思った秀郷は、将門と18人の武士の首を手厚く埋葬したとされ、その埋葬地が十九首、やがて平将門の首塚として伝わったとされます。

乱の顛末を記した『将門記』などによれば、将門はじめ19人の首級が十九首に埋葬されたという記述はなく、東国での斬首の後、首級は京都に運ばれそこで獄門に処せられ

十九首塚のある
東光寺山門

十九首塚

たとされています。近年の研究では、首級は京都、胴は東国、この両者の間隙を埋める逸話がやがて各地に怪奇譚とそれにまつわる首塚伝承・伝説として生成され、また、それらの伝承・伝説が登場するのは天和年間（1681～83）以降だと考えられています。したがって、掛川の十九首も実際に首級が埋葬されたのではなく、日本各地に伝わった将門首塚伝説の中の一伝説の可能性が高いと考えられます。

十九首の歴史

十九首としての地名は、いつごろから存在したのでしょうか。慶長9年（1604）に記された『下股村検地帳』には「十九首」の地名が見られます。検地とは中世から近世にかけて行われた田畑の面積と収量の調査のことで、検地帳とは現在の課税台帳に相当するものです。また、十九首には最初に十九首権現が祀られていましたが、慶長6年（1601）に十九首八幡宮へと神体が換わったとされています。これらの史料には具体的な平将門や首塚に関する記述はないものの、遅くとも戦国時代末期には「十九首」と呼ばれる地名が存在したことは間違いありません。

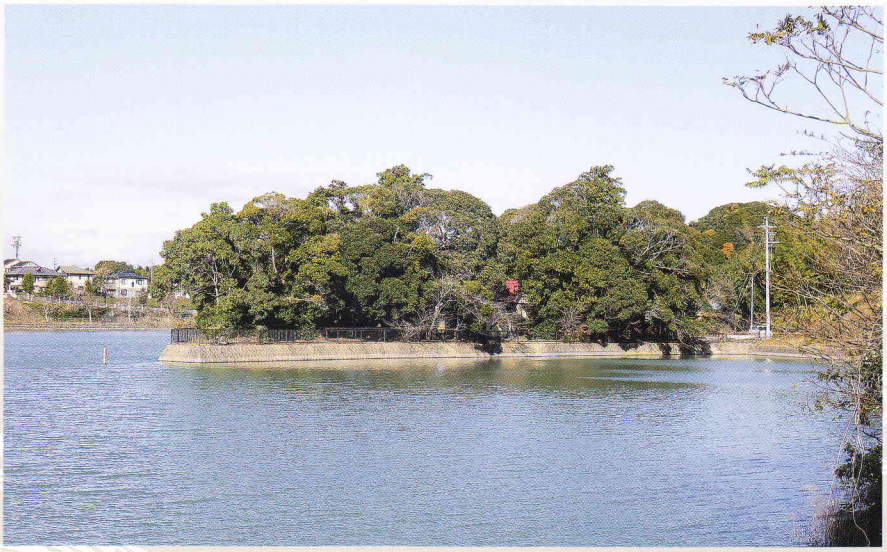
十九首の神体が権現から八幡宮へ換わった理由はよくわかっていませんが、平将門が新皇を名乗った際、八幡大菩薩から皇位を授かったとされ、将門と八幡宮との浅からぬ関係を見出すことができます。また、八幡宮に祀られる八幡神は、応神天皇の神霊、皇祖神とされ、平安時代後期以降には武家から武神（武運の神）として、朝廷はもちろんのこと一般庶民に至るまで多くの崇敬を集めました。さらに、神仏習合により八幡大菩薩として、日本各地の神社内に神宮寺として祀られ広まり、十九首権現も八幡神の信仰拡大に伴い権現から十九首八幡宮に換わったと考えられます。

時代を経て江戸時代の17世紀末から18世紀初頭の頃、十九首八幡宮は分祀され、首塚は十九首の地で祀られ続けるのですが、八幡宮が逆川沿いにあり川の侵食を避けるため大池地区の池辺神社に遷座されました。池辺神社の北には二つ池と呼ばれる池があり、現在でも池面に突き出した半島部に八幡宮を祀る社が鎮座しています。

十九首と井伊家

この分祀と遷座時期は、掛川藩において藩主が北条家から井伊家に代わった時期にあたります。井伊家は、万治2年（1659）から四代半世紀近くにわたり掛川藩主を務めました。最初に掛川藩主となった井伊直好は、父の直勝とともに上野安中藩から三河西尾藩を経て掛川に入りました。直勝・

池辺神社の八幡宮社



池辺神社の八幡宮社遠景

掛川藩主井伊家四代

直好父子は、徳川四天王として徳川幕府黎明期を支え、彦根藩初代藩主となった、井伊直政の長男と孫にあたります。井伊直政は戦国時代末期、井伊家断絶の危機を直虎らとともに救った、井伊家にとってはまさに中興の祖として祀られていた人物でした。

そして、何よりも掛川の地は、井伊直政の父親直親が掛川城下で殺害されるという事件に見舞われた、井伊家にとっては因縁の地でした。井伊直親は、直勝・直好にとって井伊家中興の祖である直政と並ぶ崇敬すべき祖先であり、井伊家は掛川藩主として奇しくも崇敬すべき祖先終焉の地に入封することになったわけです。

十九首八幡宮の分祀と遷座は、掛川藩主となった井伊家の関与が考えられそうです。あくまでも想像の域を出るものではありませんが、十九首の地名の起こりが戦国時代末期の16世紀後半まで遡ることと、17世紀末とされる各地の首塚伝説の登場時期を勘案すると、十九首の地名は直親終焉の地に由来するもので、その慰霊と顕彰のために井伊家が平将門の首塚伝説を重ね合わせ祀り伝えていったとも考えられます。また、二つ池の池面に臨む八幡宮の景観は、井伊氏の発祥の地である井伊谷の奥浜名湖周辺や、琵琶湖を臨む井伊彦根藩の本拠彦根城周辺の景観と重ね合わせていたのかもしれません。

江戸時代、掛川藩主として入封することとなった井伊直勝・直好父子、直勝は彦根初代藩主直政の長男で、本来であれば直勝が彦根藩主として井伊宗家を継ぐはずでした。ところが、井伊家の度重なる内紛に対し直勝が家中を統率する能力に欠けていたことと、直勝自身が病弱であったことから弟の直孝が彦根藩二代目藩主となりました。

万治2年（1659）から四代にわたり掛川藩主を務めた井伊家ですが、掛川藩でのようすを示す史料はほとんど残されていません。井伊家の足跡としては、可睡斎（袋井市）に高さ1.8m程もある大型の五輪塔が直勝・直好父子の墓塔として残されています。彦根井伊家の菩提寺は清涼寺（滋賀県彦根市）なのですが、分家となった直勝・直好父子は本家とは別の地点、掛川藩に近い可睡斎を墓地としました。可睡斎は清涼寺と同じく曹洞宗であることに加え、徳川家康ゆかりの寺院であることから、幕府との関係を意識して可睡斎に墓塔を建立したと考えられます。また、現在、油山寺（袋井市）にある山門は掛川城から移築された大手門で、万治2年（1659）に井伊直好が普請したものです。

二代直武（19代藩主）は「愚案な将（愚かな藩主）」、「婆娑羅（派手で乱れた）」と評され、あまり評判は良くなかったようです。直武の足跡は、徳川家の菩提寺である寛永寺（東京都台東区）に直武が大型の石燈籠を奉納しており、現在、羅漢寺（東京都江東区）に

井伊直武が奉納した石燈籠（羅漢寺）

高巌院殿　尊前
延寶元年八月五日
遠州掛河城主
従五位下伯耆守
藤原姓井伊氏直武

高巌院とは顕子女王の法名。徳川幕府四代将軍徳川家綱の御台所（正室）。伏見宮貞清親王の第三王女。延寶元年（一六七三）八月五日没。顕子女王の死を悼み、掛川城主井伊直武が石燈籠を奉納。

井伊直勝墓塔（可睡斎）

井伊直好墓塔（可睡斎）

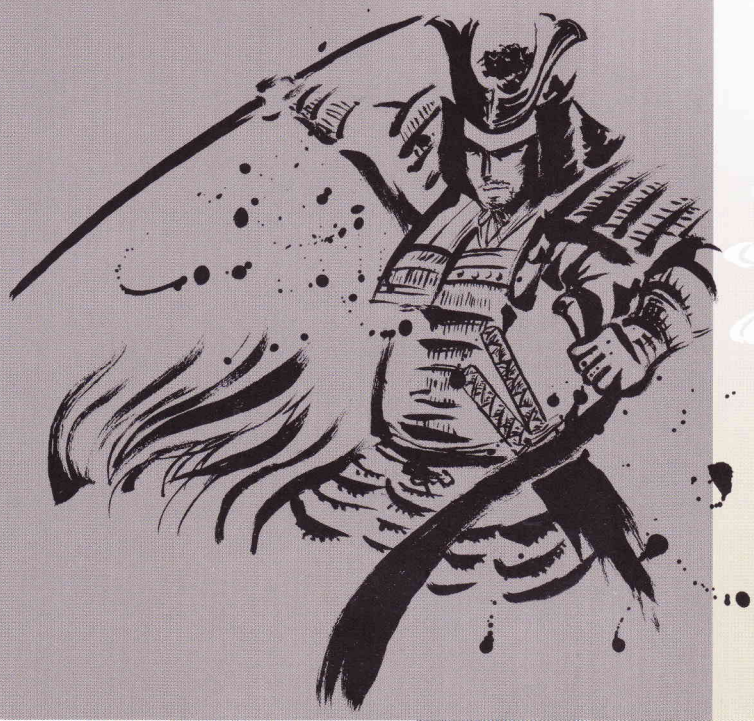
保存されています。

直勝・直好・直武は、本来であれば井伊宗家として彦根藩主を継承する血筋でしたが、井伊家分家としての存在を幕府に顕示するとともに関係を強固なものとするため、家康ゆかりの寺院に墓塔を建立したり、幕府に石燈籠を奉納したのだと考えられます。

三代直朝（20代藩主）は参勤交代を怠るという失態を起こしてしまいました。参勤交代は武家諸法度にも規定された重要な奉公で、それを怠れば改易となるところですが、直朝が精神的な病との理由で改易を免れています。おそらく徳川幕府による、井伊直政の直系である掛川藩井伊家への並々ならぬ取りなしがあったと考えられます。

エピローグ

掛川城下での井伊直親殺害と十九首について、両者に伝説を紐帯とした深い関係性を想定しましたが、両者の関係を裏付ける史料は存在しないため、積極的に首肯できるものではありません。また、想定したような関係が存在したとしても、いくつかの疑問点も残ります。

掛川藩主となった井伊家が悲運の将、直親の終焉の地を慰霊、顕彰したとすると、なぜ「平将門の首塚」と重ね合わせて祀ったのか、祀る必要があったのでしょうか。もう一つの疑問は、江戸時代の終わり頃までは「井伊直親殺害の地」としての伝承が存在したものの、それ以降は「平将門の首塚」伝承だけが流布し、直親殺害についてはほとんど忘れ去られてしまいました。その原因は何なのでしょうか。

十九首は、掛川城にとって裏鬼門にあたる重要な場所であり、現世と、神域もしくは死後の世界としての常世とを分ける境界としての象徴的な場所でもありました。そのような場所にある十九首は、平将門の首塚伝説と井伊直親殺害の伝承地として、凶事の封じ込めと慰霊、さらには盆供などの先祖供養を混然とさせながら今日まで地元の人々によって祀られてきました。伝説と伝承に彩られた十九首は、地元の人々の篤い信仰とともにいくつかのミステリアスな疑問符を投げかけながら、ひっそりと鎮座しています。